

# PICK UP MOVIE

## 『黒の牛』

2/27~

[2024年／日本・台湾・アメリカ／スタンダード&シネマスコープサイズ／白黒&カラー／5.1chサラウンド／114分]

監督・脚本・編集：蔦哲一朗 音楽：坂本龍一

出演：リー・カンション、ふくよ（牛）、田中混、須森隆文、  
ケイタケイ ほか

© NIKO NIKO FILM / MOOLIN FILMS / CINEMA INUTILE / CINERIC CREATIVE / FOURIER FILMS

### 大自然と共に生きるということ



超越的かつ普遍的な瞑想体验

その昔、山が火事で焼けてしまい、山から里に下りてきた男がいた。男はあたりを見回し、そのたたずまいをじっくりと眺める。畑から食べ物を得て、人々と交わり、里での暮らしを始める。大自然のなかにぽつりと存在して静かに生きていく男を、台湾の俳優リー・カンション（李康生）が演じている。

リー・カンションのデビュー作「青春神話」（蔡明亮監督 1992年）の印象は鮮烈だった。繁栄を極める消費社会・台北で、現実感覚を掴めないまま彷徨する若者。この作品は蔡監督にとってもデビュー作だが、若者たちの凄まじいまでの閉塞感を、深層心理の不可思議にまで眼差しを向けて、冷徹に描き切る力量に感動したのを覚えている。その後も2人は共に多くの作品を世に送り出したが、その過程で磨かれたリー・カンションの神秘性を帯びた演技力が、「黒の牛」に見事に結実している。

本作の蔦哲一朗監督は、これまでにも人間が大自然のなかでどう生きるのかを見つめてきた。この作品では、山を下りて里で世俗に染まらざるを得なくなった男が、自然との関係を取り戻して生きようとする姿を描いている。そこで取り入れたのが美しい黒い牛だ。白黒フィルムで撮られた牛の動きが、驚くほどさまざまなことを語りだすさまは、まさに映画の魔術とさえ言える。

さらに牛と人間、人間と自然、人間と宇宙というテーマを深く語るために監督が取り入れたのが、「十牛図」という禅の教えた。これは悟りに至るまでの過程を10枚の絵だけで表したものだが、蔦監督は、これは万人の人生に当てはまり、世界や宇宙の真理を語っていると思ったという。

大自然のなかにぽつりと存在する男。彼が牛を探し、牛と出会い、それを飼いならし、共に畑を耕し、人と交わり、そして無に還っていく。そのありさまをこの作品はじっくりと追っている。少ないセリフ、生身の牛、抽象化された里の人々の営み、切り詰めた音と音楽、そして何よりも35ミリフィルムと70ミリフィルムでとらえた圧倒的に美しい自然。見終えたとき、人智を超えた何かに触れた感じを覚え、自分の人生に深く思いをいたしたくなる。稀に見る秀作だと思う。

#### プロフィール

#### 田村志津枝

：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンドーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。